勘違い青年の海軍奮闘記

勘違い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勘違い青年の海軍奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ８３２６Ｚ

【作者名】
勘違い

【あらすじ】
幼馴染を探して海軍に入隊し、スピード出世している見た目は少年の青年が居た。その青年の異名は＜先読み＞。でも本当は“勘違い”と“運の良さ”だけ。だけど世界から信頼されている、ちょっと不思議な物語。今年もよろしくおねがいします＾＾

第一話　海軍に入隊した理由（プロローグ）（前書き）

登録してから最初に出そうと思っていた小説です。
でも書き直して、投稿しました。

（余談　完結済みと非公開中と連載を入れて１１作品目です。）

第一話　海軍に入隊した理由（プロローグ）

「少将、革命軍が反乱をおこし至急北の海に出動せよと要請が。」

『・・・・南だ。』

「しょ、少将？・・・・・・ハッ、まさかっ！！」

バタバタ

「少将！たった今連絡が！革命軍が南の海にて反乱を！！北の海の騒ぎは布石だったようです！」

『よし、行こう。』

「すごい・・・・革命軍の動きが嘘だと最初から分かっていたんだ・・・・・・

これが海軍本部少将、“先読み”のツバサ」

翼　Ｓｉｄｅ

元々僕が海軍に入隊志願した理由は・・・・・・・・・・・・・

幼馴染を探してだった。

なのに・・・・・・

なのに・・・・・・

居ないじゃんか！あの馬鹿、何処の部隊に居るんだよ！

翼　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

幼馴染　Ｓｉｄｅ

翼がまだ６歳の時の頃。

「あ！ワッフル！」

「おれが買ってやるよ。自分のを取って来い。」

これは普通のワッフルではない。

当たりつきのワッフルで、物凄い確率で当たると言う。

何故そんなに物凄いのか。

このワッフルは有名で人気だったが、ある一人のオーナーがこう言った。

「記念に世界に出荷するワッフルの一つだけに宝石を入れましょう。」

それで、物凄い確率で当たる、一つだけ宝石入りのワッフルになったのだ。

「コレがいい。」
「よし。コレ下さい。」
「はいよ。」
「ほら。」
「ありがとう！」

「？」
「どうした。」
「おばちゃん！」
「どうしたの？」
「なんか入ってる。」
「え？」
「おいおい、嘘だろ・・・・。」

ワッフルの中に入っていたのは・・・
「そりゃ、当たりだよ！凄いね、ツバサ君。」

当たり宝石だった。
こいつの運の良さは世界一と言ってもいい。
「・・・うん。」

それから4年が経ち、俺らは野望を叶える為に出航することにした。
「ツバサ、お前も海賊にならないか？」

「え？・・・・無理。」

ガクッ
「キャプテン大丈夫ですよ！俺ら海賊だから！」

「そうだな。後で奪えば良いよな。」

「アイアイキャプテン！」

「ロー！僕、海軍に入って追いつくから！」

「誰が海軍だ！海賊って言ったはずだ！」

「海軍に入る！」

「もう良い。じゃあな！迎えに来るからな！」

＝現在＝

「キャプテン！ツバサの事が新聞に載ってるよ！」

バサッ

「あの馬鹿、何海軍に入ってんだ！」

「凄いよ！この若さ（１０代）で少将だよ！」

「海賊と海軍を間違ったんじゃねえの？」

「ペンギン、それは無いだろ。」

「キャプテン、ツバサならありえるよ！」

「そうだな。」

あの馬鹿（ツバサ）は海軍に入ってしまい、奪うことが出来なくなってしまった。

ったく、なんでいつも、俺の願いを打ち砕きやがるんだ！

トラファルガー・ロー　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

これは勘違い青年の海軍奮闘記。

第一話　海軍に入隊した理由（プロローグ）（後書き）

最初の報告の時、翼が考えている事は次回にて。

第二話　部下チョー怖い（前書き）

冬休み中とか、休日（何も無い、暇な日）（学生なので）には、この時間帯には一話ぐらいは投稿してます。（なんかの目標？的な）

第二話　部下チョー怖い

翼　Ｓｉｄｅ

僕の名前は翼（ツバサ）。海軍本部の少将をやってるよ。よろしく。

『（腹減ったな・・・・・何か甘い物が食べたいな～。・・・そういえばこの間、雉がおいしいケーキ屋があるって言ってたな。どこの海って言ったっけ。え～と・・・・）』

「少将、革命軍が反乱を起こし至急北の海に出動せよと要請が。」

『・・・（あ！思い出した！）南だ。』

「少将？・・・・ハッ、まさか！！」

バタバタ

「少将！たった今連絡が！革命軍が南の海にて反乱を！！北の海の騒ぎは布石だったようです！」

『（ちょっと位休んでも良いよな？）よし、行こう。』

「すごい・・・革命軍の動きが最初から嘘だと分かっていたんだ・・・・・

これが海軍本部少将、“先読み”のツバサ」

『（ん？あれ部下二人がこっち見てる。あれこいつらいつ来たんだ？はっ！？まさか抜け出そうとした事がバレた！？）』

「（す、すごい！流石先読みのツバサ）」

「（この人が居る限り海軍は安泰だ。）」

部下は感動のまなざしを向けているのだった。

『（めっちゃ睨まれてる！）一緒に行くか。（こうなったら道ずれ作戦！！）』

「「はい！！」」

そして俺の艦は南の海へ

「少将！俺一生貴方について行きます！」

『（何！？絶対にサボらせないという宣言なのか！？部下チョー怖い）』ブルブル

寒気がしたから、準備運動でもしている。震えながら。

「少将？寒いんですか？此処は南の海ですよ？」

「どう見えても、準備運動だろ。」

「ハッ、まさか・・・・少将も戦闘に！？」

『（え？銭湯？）え、あ、うん。久しぶりだな。』

「久しぶりに少将の見たいです！」

「俺も！」

「俺も！」

『（なっ！部下ってこんなにエロかったっけ？）まあ。わかった。』

「本当ですか！？」

『ああ。（何、返事してんだあああああ！！僕はああ！！）』

何故か、部下の頼みには少し弱い翼であった。

そして、革命軍を摘発して軍艦で翌日に海軍本部に戻った。

その朝の新聞を部下が食堂で読んでいた。

その日の新聞の見出し

〈先読みのツバサ少将！革命軍を一網打尽に！！〉

海軍本部所属のツバサ少将が南の海にて革命軍を一斉摘発。関係者の話によるとツバサ少将は最初に起きた北の海の騒動が起きた時も冷静で一言「南だ」と呟いたそうだ。少将が呟いた通りに南の海で革命軍が動き出した。

少将はその知らせを聞いたと同時に配下の海兵と一緒に南の海へ。

少将の素早い指示のおかげで革命軍の動きは封じられた。

海軍本部の時代を担う戦力か？

ツバサ少将の活躍には今後も目が離せない。

「だってさ。」

「少将凄いもんな。」

『（何！？やっぱり、サボろうとした事が！？）』

翼　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

部下が感動してるのに、一人だけ勘違いしている翼だった・・・。

第二話　部下チョー怖い（後書き）

ナレータ役の作者も呆れてます。

戦闘を銭湯と間違えたのは作者の実話ですが・・・。

（雉は青雉のことです。わざとです。）

第三話　なんで居たの？（前書き）

【速報！】

第四話、１１時から～１３時の間に更新予定。

第三話　なんで居たの？

翼　Ｓｉｄｅ

海軍本部にある僕の職務室に帰ると・・・・

「あ、おかえりツバサ君。」

『なんで飛べない雉が。これは、何かのドッキリ？』

「違うよ！もう。」

海軍本部大将の（青）雉が居た。

『雉って飛べないよね？』

「え？どうしたの！？」

『いやー。だって、雉って言うじゃん。』

「おれは雉じゃないよ！ただの異名。あ、ツバサ君は雉って言ってるけど、本当は青雉だよ。」

『興味無い。』

「むう。・・・・・・ん？それ宝石？」

『これは思い出の品さ。幼馴染と一緒に食べた時、ワッフルから出

てきた当たり。』

「あ～あの当たりつきワッフル？ツバサ君が当たりを引いたんだね。」

『まあ。』

「あれ、物凄い確率だよ。」

『え？そんなに凄いんだ。（僕、普通に取っただけなんだけど。）』

「うん。」

『雉ー。』

「何？」

『後ろに人だかりがー！』

人だかりって言っても3人だけど。しかも、全員、僕の部下。

「え？」

「少将、当たったんですか！？」

「凄いです！」

「さすが少将！」

「ねえ。」

「「「!?大将殿!?」」」

「何しに来たの?」

「あ、伝言です。」

『伝言?(まさか、仕事関係じゃあ無いよな・・・)』

「大将、仕事をサボらないで下さい!」

「と、言う伝言。」

「はぁ。分かった分かった。行くから。」

「大将が部屋に戻るまでお供します!」

「ええ!?俺、そこまで信用無し?」

「「「『はい。』」」」

「ツバサ君まで!?」

『(だって抜け出そうとも、その時には部下が居るもん。)』

「分かったから!もう!」

足早に雉が戻っていった。

てか、何で居たの？

ま、いいや。

それより・・・・・・

『・・・・・本当に何処に居るんだろうローは・・・・・・。』

翼　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

～オマケ～

＝海軍本部＝

『もしかしてローの奴、海賊になってたりして！まぁ、あの極悪人面ならありえるか。あはははは！！』

＝海賊船（潜水艦）＝

『ギャァァァァァ！キャプテン新聞の写真のツバサにメスぶっ刺した！！』

『何してるのキャプテン！？』

『今こいつが俺の悪口を言ったような気がした。』

『えぇぇぇぇぇぇぇぇ！？』

第三話　なんで居たの？（後書き）

もしかして、ローとか好きな人、読者の皆さんの中に居ましたか？

居たら、謝っておきます。

ローをこんな風にして、ごめんなさい。

でも、後々会いますから。

あ、感想待ってます。

第四話　白くまのぬいぐるみ（前書き）

１３時って書いてあるけど、１３時５９分までって事です。

ある人からある人のような白クマのぬいぐるみを貰います（届けに来てくれた）。

さぁて誰でしょう？

答えは下です。

（今回はいつもより長めです。）

第四話　白くまのぬいぐるみ

『今日は何人来るんだろう？』

「まぁ、どいつも気まぐれな者ばかりだからな、予想はつかん。」

『でも、僕、絶対にあの桃色鳥は来ると思うよ。』

「桃色鳥？」

『・・・・・ドフラミンゴ。』

「あぁ・・・・確かに桃色鳥だな。』

兵士　Ｓｉｄｅ

俺は最近ツバサ少将の下についた新人海兵。
ツバサ少将は俺達新人海兵の間でも話題の人である。

若くして海軍本部少将の地位に昇りつめ上層部達からの信頼も厚い将来を担う海兵。
そして異名である〈先読みのツバサ〉。
悪魔の実の能力と言う訳でもないのに彼は未来に何が起きるか予測出来るのだ。

つい先日も少将が未来を見通し革命軍の攻撃を最小限に抑える事が

出来た。
しかし、彼はその力を自慢するわけでもなく、
ただ静かにいつも虚空を眺めている。
まるで来るべき悲劇を知りながら祈る事しか出来ぬ悲運の乙女のようだ、少年だけど、と皆は言う。

まさにその通りだ。
少将は普段は明るく気さくな方ではあるが時々とても悲しそうな顔をなさっている。
とても儚げな様からはとても海軍本部少将とは思えない。

一体この少年は何を背負ってそんな顔をするのだろうか。
少しでも彼の憂いを取り除く力になりたい！
少将の下に集う海兵は皆そう思い、少将の力になるように日々尽力している。

もちろん、俺もその一人だ。

コンコンッ

「少将、いらっしゃいますか？」

『いるよ。入って良いよ。』

「失礼します・・・・・・・って、た、鷹の目！？」

「な・・・なんで、鷹の目が・・・・」

『暇つぶしらしいよ。な！ミホーク！』

「翼、お茶が無くなった。」

『ほ～い。』

驚いた・・・少将の部屋の扉を開けるとそこには王下七武海の一人、鷹の目ことジュラキュール・ミホークが居た。
少将は鷹の目とまるで久しぶりに会った友人のように接している。

すごい・・・・。
俺なんて、あの目を見るだけですくんでしまうのにツバサ少将は・・・・

やっぱり、この人すごい！

兵士　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ミホーク　Ｓｉｄｅ

「随分と下の者に尊敬されているんだな。」

『そうか？僕は逆に若いくせに何で少将なんだよって、いついじめられるかヒヤヒヤしてるんだけど。』

「ふっ、主に限ってそれはないだろう。」

もうすぐ七武海の召集ががあり、おれは少し早く海軍本部に足を運んだ。

理由は二つ。

一つはおれが暇だったから。

もう一つはこいつ、翼に会うためだ。

翼と出会ったのは、まだ翼が新米海兵であった時だった。

翼はおれを含む七武海を目の前にしても臆することなくおれ達にくってかかってきた。

新米でありながら己の意志を貫き通すその強さに惹かれたのはおれだけではないだろう。

今では翼はつる大参謀と共に七武海の相手をするようになり、こうして顔を合わせる回数が多くなった。
あの男嫌いな海賊女帝、ボア・ハンコックでさえ、自国の入国の許可しているのだ。
翼は今では海軍には欠かせない逸材となっている。

『ミホーク、本当にありがとう！ちょっと仕事が忙しくて買いに行けなくてさ。』

「主の頼みだ、断る訳が無い。だが、主もやはりまだ子供だな、そのようなもので遊ぶとは。」

おれが少し早く来た理由。
それは翼に頼まれたものを届けるためだった。

それは・・・・・・・・・・・・

『そうだよ！子供だよ！良いじゃん！可愛いじゃん、この白熊のぬいぐるみ』

白くまのぬいぐるみ

『オーダーメイドなんだけど、どうしても取りに行けなくて……本当に助かったよ。』

「まぁ、良い暇つぶしにはなった。しかしそのようなもの別にオーダーメイドにせずとも、そこら辺の雑貨店に行けば買えるだろ。」

『駄目だよ！白くまは白くまでもこの顔じゃないとダメなんだよ！』

「（このように嬉しそうに、やはりまだまだ子供だな。）まぁ、大事にしろ。」

海軍少将とはいえまだ幼さを残す少年。

この少年に笑顔を与えられるのならばおれは喜んで力を貸そう。

ミホーク　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

～オマケ～

『どうしたの？ミホーク。なんか笑ってない？』

「いや、別に気にするな。」

「フッフッフ、ツバサいるか？」

『あ、やっぱ桃色鳥来た。』

「五月蠅いのが来た。」

「お前が白くまのぬいぐるみを探していると聞いてな。おれからのプレゼントだ受け取れ！」

『でかっ！？本物よりでか！？』

~オマケのオマケ~
とある日の新聞。

最近流行の白くまのぬいぐるみ。
このぬいぐるみは今話題の海軍少将が特注で注文したものらしい。
噂を聞きつけツバサ少将が注文したこの白くまのぬいぐるみの注文が殺到している。
今は通販も受付中。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「・・・・・この白くま、どう見てもペポだろ。」

「お、おれが大量に新聞に載ってる」

「キモッ！大量のベポ、キモッ！！」

「この白くまのぬいぐるみ一つ注文したいんだが。」

「キャプテン！！？なに注文してるの！？注文しなくても此処には本物がいるって！！」

白熊（ベポ）のぬいぐるみ、只今、世界で流行中。

第四話　白くまのぬいぐるみ（後書き）

はい。答えは鷹の目です。
桃色鳥はおまけ的です・・・。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

あと訂正します。

投稿時間帯が広くなりました。

大体１０時～１８時です。（ピーク？とかは昼です。アバウトだけど・・）

第五話　遭難（前書き）

【速報】

今日は2話以上（2話で終わるかもしれないけど）更新予定。
コレを投稿したら次回を書き始めてます。

第五話　遭難

偉大なる航路のとある地域で僕は部下に連れられ軍艦でパトロールをしていた。
そんな時突然、嵐に遭い僕は海に投げ落とされた。

雉　Ｓｉｄｅ

その知らせは突然だった。

「大変です！ツバサ少将が海に落ち、遭難されました。」

おれは他の大将、ボルサリーノとサカズキとセンゴク元帥と会議中だった。
そんな時、一人の海兵が知らせを持って来た。

ツバサ君の遭難

「な……一体あいつに何があった！？」

センゴクさんも珍しく取り乱す。

そりゃそうだろう。
ツバサ君は海軍に入ってから一度も問題を起こした事が無く、優秀な海兵だ。
そんなツバサ君が海に落ちるミスをするとは思えない。

「それが……
ツバサ少将の船が嵐に遭い、一人の海兵が海に落ちそうになったのを少将が助け、代わりに少将が海に……」

雑　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

兵士　Ｓｉｄｅ

「おい！大丈夫か！？」

「っく……駄目だ……手がもう……」

迂闊だった、軍艦の甲板に居た俺は突然の突風に耐え切れず吹き飛ばされそうになってしまった。
なんとか船の縁にに捕まったがこの嵐で船は揺れに揺れ、今にも俺を振り落としそうな勢いだ。
仲間は必死に俺を引き上げようとするが、もう限界だ。

このまま、海に落ちてしまうのか……

「なっ！！少将！？」

『どいて！』

仲間の驚きの声と共に現れたのは、我らが愛してやまないツバサ少将。

ツバサ少将は切羽詰った顔でこちらに走ってくる。

突然の事で俺も驚いていたら少将は俺の腕を掴み落ちてくる。

「しょ、少将！？」

『しゃべるな』

「！！？？」

少将は海に落下していく中、勢いよく俺を上へと振り上げた。

そのおかげで俺は甲板に……

しかし、ツバサ少将は……

「少将……」

「お、おいお前大丈夫か！？」

「俺よりもツバサ少将が海に……！」

「ツバサ少将……お前を助ける為に……」

「そんな……

そんなツバサ少将ーーーーー！！！」

兵士　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

雉　Ｓｉｄｅ

「…あのお人よしが……」

なんともツバサ君らしい理由だ。

ツバサ君はいつでも自分より他人を優先する。

本当に正義の魂のような子だ。

「センゴクさん、わっしが行きましょう。ツバサ君は能力者じゃないけど心配だ。」

「待て、ボルサリーノ。わしが行こう。」

珍しい。あのサカズキが他人のために動くなんて。

それだけツバサ君が愛されてるってことなんだろうけど。

ミシッ

うん？今、扉が嫌な音を。

バキッ

ズサアアアア

「「「「！？」」」」

扉を破ってきたのは、残りの上層部の海兵だけではなく、将校達も居る、沢山の人、人、人、人。

「私が行くよ。」

「いや、俺だ。」

「俺だ！」

本当にみんなに愛されてるツバサ君。

「俺が行くよ。」

助けに行く権利は渡さないよ。

「はぁ。何も将校全員が行かなくても仕方ないだろう。青雉、お前が行け。必ず、ツバサを助けろ。」

「はい！」

雉　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

翼　Ｓｉｄｅ

あの日は本当に酷い嵐だった。
僕は室内の窓からボーっと外を見ていたら、なにやら甲板が騒がしかった。

少し気になり甲板を覗いて見たら、いきなりの突風で僕の体は風に捕まった。

『ちょっ……あわわわわわ』

風に従い僕はどんどん進んで行く。
すると前に部下達が居た。

『（マズイ、ぶつかる！）どいて！』

海兵達は突進してくる僕に驚き避けて行く。

……いや、確かに「どいて！」って言ったけど止めてほしいな～。

誰か一人くらい助けろよ！！

そんな事考えてたら、僕の体は空を舞っていた。
下は海。
しかも、とっさに誰かの腕を掴んで巻き添えにしてしまったみたいだ。

やべーよ。絶対こいつ怒ってるよな……

「しょ、少将！？」

『（やっぱり怒ってる！？え、でも今は揉めてる場合じゃ……）しゃべるな。（後で文句は聞くから、誰か助けろぉぉぉぉ！！）』

空中でジタバタしていたら、僕はいつの間にか彼の腕を放し、僕だけが海の中へ……

……嘘だろーーーー！！！

海の中で、もがく僕は何かにしがみついた。
なんだこの物体。
いや、この際なんでもいい！とにかく何かに掴まらなきゃ……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

『…………ん…………』

「お！気がついたな！」

『…………あ（誰だこいつ）』

翼　Side　out

〜オマケ〜
その頃、海軍本部では……

「いいか、絶対に見つけて保護しろよ。」

「頼むよクザン〜。もしツバサ君に何かあったら……」

「燃やしてやるからな。マグマをなめるなよ氷小僧。」

「（ヤベー。このおじさん達怖い！本当にツバサ君どこぉぉぉぉぉ）」

」

第五話　遭難（後書き）

次回はあの人達（海賊）に会います！

超有名な大海賊のある人達です。

第六話　火拳（前書き）

いつも通り、洋楽を聞きながら投稿してたけど、遅くなりました。

第六話　火拳

???　Side

俺はあの嵐の日、親父の使いで

「あーやばいな。嵐が本格化してきた……」

「おいおいエース大丈夫なのか？あーあ、こんなことなら船にいれば良かった。」

「……だったら今すぐ降りろ！！狭いんだよ！！」

サッチと一緒に海に出ていた。

本当は俺一人だったのに、サッチが

「あ、俺暇だからついてく～。」

と、言って勝手に乗り込んできてきやがった。

鬱陶しいことこの上ない。

サッチとギャアギャア言い合っていたら、いつの間にか嵐のど真ん中に入ってしまい、俺達を乗せたストライカーが揺れに揺れまくり、バランスを崩した俺は海の中に落ちてしまった。

「（しまった！力が抜けていく！！）」

能力者である俺は泳ぐ事が出来ない。

このまま死んでしまうのか……

そう覚悟を決めた時、

俺はあいつに助けられた。

海の中でもがいていた俺は、いきなり何かに引き上げられ海面に出る。

「っぷは！！な、なんだ？」

海面に出る事で息をする事が出来て、俺を引き上げたモノを確認すると、

「しょ・・・・少年！？」

俺の脇に手を回し引き上げてくれたのは、俺より小さい少年だった。

しかも、こいつは・・・・・・・・・・

気を失っているのか、俺を掴んだままぐったりしている。

「な……確か、こいつは今噂の海軍少将……か？ってなんでこいつ俺を助けてんだよ！？」

しかし相手は一向に起きる様子も無く、俺も力が入らず気を失ってしまった。

どの位時間が経っただろうか。

起きたら、見知らぬ島に流れ着いていた。

そして俺の隣には例の海兵が……

「なんで……海兵のくせに俺を……」

『……ん……』

「お！気がついたな。」

『……あ。』

エース　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

翼　Ｓｉｄｅ

目が覚めた僕の目の前には知らない男が居た。

……いや、一体誰だ？

「・・・・・・・・・・・・・」

『（ヤベェ、この兄ちゃんなんかめっちゃ睨んでくる！？あれか、勝手にしがみついたのを怒ってるのか！！怖いよ、この人。本当に怖いよ。なんでこの人上半身裸なんだよ！？）』

『体が勝手に動いた。（だから悪気は無いよ！！）それだけです。』

なんか上半身裸族の兄ちゃんに睨まれ、僕は蛇に睨まれた蛙の如く固まってしまった。

けど、とりあえず弁解をした兄ちゃんはカッと目を見開いた。

やばい！殺される！？

なんか僕がお菓子を横取りした時のローの目と同じだ。

殴られる！？

翼　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

エース　Ｓｉｄｅ

目が覚めたあいつを見てなんで俺を助けたのか考えていたら、あいつはこちらをじっと見ていて何の迷いも無い目で言い切りやがった。

『体が勝手に動いた。それだけです。』

俺が何を考えているのか読み取るかのようにあいつは答えた。
敵である俺を助けたのを体が勝手に動いたからと当たり前のように言う。

そういえば親父の船で仲間になる前に海軍に捕まりそうになったりしたら、秘密裏に逃がしてくれたり、サイクロンに巻き込まれそうになったのを助けて貰った事があると言う連中は多く居る。
海軍でありながら、こいつは海賊の間で実はちょっと人気がある。

あの親父でさえ、こいつは海軍だがなかなか良い目をしている、気に入ったと新聞を見て言っていた。

親父に気に入れられるくらいの奴だ。
こいつの前では海軍も海賊も関係無いのかもしれない。

助けを求める者に助けの手を伸ばす。

こんなに小さいのにこいつは・・・・・

エース　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「お前・・・・・本当に凄い奴だな。」

『へ？』

「さっきはありがとうな。」

『ど、どういたしまして。（何がありがとうなんだろう？とりあえず空気読んでおこう。）』

火拳に助けられる

～ちょいオマケ～

「俺の名前はエース。よろしくな。」

『あ、僕、翼です。（うん？どっか聞いたことが・・・・）』

第六話　火拳（後書き）

掴んだのは、「エース」でした。

今日はまだ投稿出来そうです。

何もやる事無い。（宿題は残ってる。）

あ、感想待ってまーす！

第七話　歩くフランスパン（前書き）

昨日は２話まででした・・・。

今日も２話更新しますよ。
２話までならＯＫ。
それ以上は、早く起きないと無理だな。

お待たせしましたー！

１１時半まで寝てました。つまり寝坊。

第七話　歩くフランスパン

サッチ　Ｓｉｄｅ

「翼、そっちに行ったぞ！」

『了解ッス！おりゃあ！」

「『とったぞーーー！！！』」

「お前ら、何してんの？」

嵐に投げ出されたエースを探していた俺は、とある無人島に辿り着いた。

其処には探していたエースと・・・・・・・

『エース！火！』

「はいよ！」

『今日は焼き魚だ！』

「おおー！」

今、話題の海兵が居た・・・・。

「ちょっ！！エース何してんだよ！？なんで海兵と・・・・。」

『ん？なんと歩くフランスパンが！？エース、今日の飯にフランスパン追加するぞ！』

「おー！」

「やめてぇぇぇぇ！！俺のリーゼント焼かないでぇぇぇぇ！！」

「へー。じゃあエースはあの海兵に助けられたんだな。」

「おー！！あいつ海軍だけど、すっげえ良い奴だぜ！」

エースに、なぜ海軍が此処に居るのか尋ねるとどうやらエースはあの海兵に助けられ、助けが来るまで一緒にサバイバル生活をしていたらしい。

今、あの海兵は海に潜って俺の分の魚を調達しに行ってるらしい。

なんか気を使わせてしまってごめんなさい。

「俺の担当は薪を拾ってくることなんだ。サッチ、手伝ってくれ。じゃないと俺が一晩中燃えていないといけねぇんだ。それだと添い寝出来ないし。」

「あれ？俺最後にとんでもねー言葉聞いた気が・・・。」

「あいつ、本当にすごい奴なんだ！出来れば親父の船に乗って欲しいな～。……あ、でももし叶うなら…」

「ツバサ君逃げてー！！ここにとんでもないお兄さんが居る！！！！」

親父、エースが少年海兵に惚れてます。

「サッチ、薪集まったか？」

「おー、つかお前薪集めないで帰ろうぜ。親父達も心配するしさ。」

「バカヤロー。それじゃあ、俺と翼のの時間が無くなるじゃねえか。

」

「……もう、お前を置いて帰っても良い？」

エースと森で、薪拾いをしている中、

ツバサが、サバイバル生活中どれだけカッコイイとか、また自分がどれだけ好きなのかを永遠に語ってくる。

その時は、エースは本当に楽しそうに語ってきてときどき興奮して体を燃やすこともある。

おい、エース。それじゃあ、山火事が起きるぞ。

「でな、サッチ・・・・。サッチ？」

「もういい加減にしろ。」

「なんだよ。カッコイイんだぜ。」

「・・・はあ。お前はな・・・。」

「よーし、これだけ集まったら、今日もキャンプファイアー出来るな。」

「え！？今日“も”！？お前ら何やっての！？」

誰か、エースを止めてくれ！

サッチ　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

エースの暴走。

～オマケ？（次回予告）～

「サッチ、早く戻るぞ。翼が海から帰ってくる。」

「はいはい。あ、なんだあれ。」

「どうした？」

「なんか悪魔の実っぽい物が落ちてる・・。」

～オマケ？（ちょっとした豆知識？）～

リーパンって知ってる？

リーパンは省略語。

リーパン＝リーゼントフランスパン

はい。もう、分かってると思うけど、サッチの事です。

これ知ってる人少ないんだよな。

まあ、考えたのは作者（自分）だからね。

第七話　歩くフランスパン（後書き）

なんか、話の後にオマケ書くのが好きになってきました。

第八話　悪魔の実（前書き）

【速報！】
やっぱり、もう一話更新します。
（よろしく）

第八話　悪魔の実

翼　Ｓｉｄｅ

無人島で意気投合したエースとサバイバル生活をして３日目。
最初こそエースが能力者なのに海に入って溺れたりする事件も発生したが、３日も経った今は、そこそこの生活も慣れてきた。

エースが海に沈んでいった時は、本気でビビった。

必死でエースを説得し、魚調達は僕の仕事になった。
目の前で人に死なれたら目覚めが悪いし、僕のせいになりかねない。

そして今日、エースを探しに来た人が島にやってきた。

良かった・・・。これで、僕も助かる。

あ、そうだ。
そろそろ陸に上がらないと。

「翼ーおかえりー。」

「悪いな。俺の分まで。」

『いえいえ、（賄賂だから）お気になさらず。』

三人で火を囲んで、僕が獲って来た魚（鯖）が焼けるのを待つ。

ああー。久しぶりの焼き魚ー。

翼　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

サッチ　Ｓｉｄｅ

海から帰って来たツバサ君に感謝を述べると、とても清々しい笑顔で気にしないでくれと答える。

へー、確かに良い子だな。
エースが気に入るのも頷ける。
まあ、俺達の船でも海軍にしては珍しく人気がある人物だしな。
心（器）が広い、少年だな。

「そういえば、サッチ。さっき拾った悪魔の実どうした。」

「あ～これだろ。どうしようこれ。」

先程、海岸に帰る途中に拾った悪魔の実。まさかこんな所でひろうとは思わなかった。

「サッチ食うのか？」

「俺が食べたら誰が海に落ちたお前やマルコ、ジョズを回収するんだよ。それに悪魔の実って不味いんだろ。俺は美味いもんだけ食いたい。」

「あぁ、そりゃ不味い。俺はこれより不味いもん食べた事がねぇ。・・・・

あ、いや一回ジジイが作ったケーキの方が・・・・・」

「お前の爺さん、何作ってんだ？」

「あれは古代兵器プルトンより破壊力上だな。」

それにしても、この悪魔の実どうしよう・・・・。

サッチ　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

翼　Ｓｉｄｅ

『お～い！魚焼けたぞ。』

「よっしゃー！」

こんがり焼けたおいしそうな魚が出来上がった。
うん。我ながら3日でスキルアップしたな。

『サッチ～これ。』

「おお。ありがとう。」

賄賂もしっかり渡したし、これで無人島ともおさらばだ！！早く帰りたいな海軍本部（マイホーム）！

「エーステメェ！何俺の魚盗ってんだよ！」

「翼から渡された物は全部俺の物だ！！フランスパンなんかには渡さねえ！！」

「この野郎・・・・これでもくらえ！！！」

ん？何やら二人が言い合いをしているみたいだが……ま、いいや。
↑魚に夢中

「うおお！？これ悪魔の実！！サッチ危ないだろ。俺が間違って食べたら死ぬ！」

「死ね。」

「何だと・・・・俺は親父が海賊王になるまで死なねえ。お前がく

らえ！！」

「俺もだあ！！トスッ！」

「負けるか！！レシープ！」

「アタック！！・・・あ・・・・」

「ハハハ～何処に飛ばしてんだよ。そんなもん当たんねぇｙ『ぐふっ』・・・ぐふっ？…

つ、翼！！？」

おいしく魚を食べていたら急に僕の方に二人が投げあいをしていた物が飛んできて、僕は思わずそれを食べてしまった。

『！？！？！？！？！？！？！？！？苦い辛いしょっぱい酸っぱいぃぃぃぃぃぃ！！！！！』

「え！？おい！？しっかりしろ！？」

「ま、まずい・・・・翼が悪魔の実を食べちまった・・・・。」

翼　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

まだ、誰も知らない。

彼が食べた悪魔の実が未来を大きく変えることを・・・。

～オマケ（次回予告）～

「ど、どうしようサッチ。翼が気絶しちまった！！」

「落ち着けエース！こうなったら仕方ない。俺達の船に一回連れて帰ろう。」

第八話　悪魔の実（後書き）

一言欄に書いて欲しい事があるのですが・・・。
（ツイッターが見れません。）

あ、リクエストがある人だけです。
なんか、リクエストとかに答えたいな～、って思いまして。
ある人は是非、お願いします。
（七武海・ハート・白ひげ・青雉・ガープ以外）

第八半（↑8．5）話　幼馴染の反応は・・・（前書き）

短いです。

第八半（↑8．5）話　幼馴染の反応は・・・

雉　Ｓｉｄｅ

ツバサ君が行方不明になってから４日。
海軍総出で探してるのに彼は一向に見つからない。
捜索隊の指揮官のおれのところにも何の報告も無い。

ツバサ君の行方不明の事は新聞を通し、世界中に知れ渡ってしまった。

世界中の人々が彼の行方を捜し、彼の安否を祈ってる。

ツバサ君。みんな君を心配してるんだよ。

君は一体何処に居るのさ。

雉　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「青雉大将！！ツバサ少将の事で情報が！！」

「一体何？」

「それが・・・・・・」

ロー　Ｓｉｄｅ

＝ある町の酒場＝

「なあ、聞いたか？あの海軍本部少将が白ひげに誘拐されたらしい。」

「マジかよ！？なんでまた・・・・・」

「おい。」

「あぁ・・・・・！？ト、トラファルガー！？」

「本当にそいつは白ひげに誘拐されたのか？」

「キャプテン落ち着いて。」

「ツバサなら絶対に大丈夫だよ！！」

「俺は心配なんてしてねぇぞ。」

今、新聞はあいつの話題で持ちきりだ。
嫌でも耳にあいつの名前が入ってくる。

・・・・・・何してやがるあの馬鹿。

いや、でも待て。

あいつの運の良さは俺が一番分かっている。

嵐にも巻き込まれようが、四皇に捕まろうが死ぬ奴じゃねえ。

だから何も問題は無い。

そしてあいつがどうなろうと俺には関係無い。

ロー　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

～オマケ～

「キャプテン、新聞逆だよ。」（Ｂ）

「・・・・・・・・・。」（Ｒ）

「キャプテン。だから新聞逆。」

「読んでない。」

「じゃあ、なんで持ってるの！？」

「じゃあ、ベポ。おれにパス！」（Ｐ）

「はい！パス！」

「ありがとう。」

第九話　白ひげとパイナップル（前書き）

更新開始は明日だけど、ちゃっかり更新。（笑）

今日は特別です。（今までの中で一番長い）

第九話　白ひげとパイナップル

翼　Ｓｉｄｅ

『・・・・ん・・』

「気がついたか翼！」

『エース・・・・・僕は・・・・・一体・・・・』

「・・・本当に御免。俺、俺・・・責任とって翼を俺の「アホ抜かすなよぃ！」ゲフッ」

『エース！？』

「「本当にすみませんでした！！」」

『・・・・・・・。』

「お前が望むんだったら今すぐにでもこいつらを海に沈めるよぃ」

「俺からも謝る。俺の息子が本当に申し訳ない。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。』（何も考えていない）

拝啓、どこかにいる幼馴染のローへ。

今日、僕は・・・・・・・・・・

『し、白ひげ（なんでこうなった）』

四皇、白ひげに会いました。

目を覚ますとエースが目と鼻から大量の水を流していました。

軽くホラーだよ。

そのエースをパイナップルが殴り飛ばす。

なんだ？

ここは妖怪ランドか？

『えっと・・・整理すると？』

「うちのエースとサッチが投げ合いをしていた悪魔の実があんたに当たって、あんたが食っちまったんだよい。」

「本当にすまねぇ翼！！俺お前にばっか迷惑かけて。」

「幸い能力者じゃなかったから良かったものの、下手したら死んでたぞアホンダラ。」

「しかも能力者になるって事は人生を左右するって事だ。敵とは言え、うちの馬鹿が本当に申し訳ねぇことしたよい。すまねぇ。」

パイナップルが喋ってる・・・。（もはや、別の事を考えてる）

翼　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

パイナップル　Ｓｉｄｅ

エースとサッチが予定より遅く帰って来た。
どこで油を売っていたのかを問い詰めようしたが、こいつらは慌ててナースたちの所へ飛んで行く。

「誰か助けてくださいいいいいい！！！」

「翼がああああ！！！」

大慌てで走ってくるエースが抱えていたものは・・・・・海兵だった。
しかも将校海兵。

エースが海兵を連れて来たことにはナースも驚いていたが、意識の無い海兵を急いで治療室に連れて行った。

その後、なんでエース達が海兵を連れてきたのか、今まで何をしていたのか、連れてきた海兵が誰なのかをみんなの前で話した。

「と、言うとエース。お前はあの海兵に助けられたのか。」

「ああ親父！でもって俺の「だからアホ抜かすなよい！」グフッ」

「・・で、お前らが島で見つけた悪魔の実で投げ合いをしていたら海兵の顔に当たって食べて気絶して連れて帰った、と・・・」

「そうなんだよマルコ！翼大丈夫かな・・・俺ちょっと見てくる。」

アホだ。
こいつらアホだ。

この世界の何処に悪魔の実を喧嘩で投げ合う奴がいるんだよい。
でもって、この世界の何処に海兵を自分の船に連れて帰ってくる奴がいるんだよい。

「あ～、で、サッチ。その海兵が食べた悪魔の実はもう分かってんのか？」

「いや、わかんねーけど・・・・あれ確か図鑑で見たことあるんだけどな～。」

「調べろ。」

「えー！！俺が！？俺もツバサ君が心配だから見に行きたいんだけど。」

「燃えるか？」

「さーて、図鑑は何処かな～？」

「テメーら、何俺の翼を覗き見してんだコラァ！」

「ちょっ！エース隊長、燃えてる燃えてる！」

「良いじゃないっすか、別に。今話題の海軍の少将ですよ？一回くらいは見たいですよ。」

「本当に小さいな。あれで海軍少将が務まるのか？」

「お前あの子なめんなよ。俺がまだ親父の所に来る前にあいつに助けられた事があるんだよ。自分の何百倍もある海王類を一撃で倒し、しかも海王類に襲われていた俺達を助けてくれたんだ。」

「俺も海兵に濡れ衣着せられて追いかけられて時、助けてくれた。」

「マジか！？流石俺の翼。」

「いや、いつからエース隊長のものになったんですか。」

海兵が運ばれた部屋の前には人だかりができ、エースがなんかピンクのオーラーを出している。

あれ？エースってこんなキャラだったか？

まぁ、この海兵は海賊なら片っ端から捕まえる奴じゃないし、起きてすぐ攻撃をしかけてくることもないだろう。
それにエースを助けて貰った礼はしないとな。

しばらくして例の海兵が目を覚ました。

『・・・・ん・・・・』

「気がついたか翼！」

『エース・・・僕は・・・・一体・・・・』

「・・・本当に御免。俺、俺責任とって俺の「アホ抜かすなよぃ」ゲフッ」

『エース！？』

起きた海兵に飛びついてとんでもないことをぬかすエースの頭をとりあえず殴っておく。

痛みにうずくまったエースを心配する海兵は俺に殴られたエースの頭を撫でている。

『だ、大丈夫か？』

「・・・・うん。」

おい気付け海兵。

エースの奴、顔がにやけてるぞ。

痛がってる奴はそんな顔しないよい。

とりあえず起きたこいつを親父の元に報告も兼ねて連れて行く。

「『本当にすみませんでした！！』」

『・・・・・・・。』

「お前が望むんなら今すぐこいつらを海に沈めるよい。」

「俺からも謝る。俺の息子が申し訳ない。」

『・・・・・・・・・・・・。』

エースを助けてくれた事、エースとサッチが悪魔の実を食わせて気絶させた事、勝手に敵船に乗せた事、こいつには色々謝らなければならない。

親父も相手が海兵であるが筋は通さなきゃならねえ、と言って親父直々に謝罪した。

『し、白ひげ・・・・。』

海兵は親父を見て驚いてはいたが、親父が頭を下げると慌てて頭を上げてくれと言う。

『元々僕の不注意が起こした事ですのでどうか頭を上げてください。』

「だがな・・・。」

『エースには無人島でお世話になったし、僕も助けて貰ったのでこれで貸し借り無しです。』

明らかにこっちが悪いのに笑いながら貸し借り無しと言う。
それどころか助けてありがとうと言う。

こいつは器が大きいのか馬鹿なのか。
親父もこれには驚いていたがすぐにニヤリと笑う。

「グララララ！気に入ったぞ海兵。お前は敵だが中々良い度胸してやがる。おい野郎共！今日はコイツに祝杯だ！」

マルコ　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

～オマケ～

「やるじゃねえかよい。あの海兵。」

「だろ！流石俺の翼。」

「エースのものじゃないよい。てか、あいつは少年だよい。」

「し、知ってるし。そんなの教えてもらわなくても分かってたし！」

「（照れてるエース。初めて見たよい。）」

第九話　白ひげとパイナップル（後書き）

はあ。疲れたー。

皆さん。

あけましておめでとうございます。

そして、今年もよろしくお願いします。

第十話　僕は一体何をしたぁぁぁぁ！（前書き）

【速報】

2話以上更新予定。

第十話　僕は一体何をしたぁぁぁぁ！

神様仏様センゴク元帥、

あ。後半二人同一人物だ。

じゃなくて、ヤベーよ！なんで僕の前に白ひげが居るんだよ！！
エースとバナナ？いや、パイナップルに連れてこられたのは、あの四皇“白ひげ”の元だった。

いくら僕でも白ひげくらいは分かるぞ！！

エース白ひげ海賊団船員だったの！？

つかエースが海賊！？泳げないのに！？

恐怖のあまりに固まってる僕に対し白ひげが頭を下げてきた。

僕は一体何をしたぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！

恐怖のあまり、何を言ってるのかよく聞き取れなかったが何やら僕に謝ってるようだ。

え？

なんであの白ひげが僕に？

はっ、きっと何か勘違いでもしてるんだ！

僕がきっとエースに迷惑をかけたのを白ひげが勘違いをしてエースが僕に迷惑をかけたと思ってるんだ。

しかし、待てよ？ここでその誤解を解いたら僕殺される？

僕は一応海軍で敵だし・・・死ぬな僕確実に。

ここは嘘を突き通すしかない！！一世一代の大芝居だ！

『元々僕の不注意が起こしたことですのでどうか頭を上げてくださ

い。』

「だがな・・・・。」

『エースには無人島でお世話になったし、僕も助けて貰ったのでこれで貸し借り無しです。』

よっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！言い切ったぞ僕！！
やれば出来るじゃないか！！

あ、でももう泣きそう。怖くて顔と膝が笑ってる。
でもって貸し借り無しを宣言しさっさとこの船からおさらばだ！

あ、でも僕悪魔の実を食べたらしい・・・・
まぁ、いざとなったら小船を盗もう。

あれ？これ海軍としてやって良い事か？

「グララララ！気に入ったぞ海兵。お前は敵だが中々いい度胸をしてやがる。おい野郎共！今日はコイツに祝杯だ！」

・・・・・・・へ？

・・・・・・・え？

僕は一体何を言ったぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

～オマケ～

「流石親父！！」

『え！？ちょっ！エース！？』

なんでこうなったぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！

第十一話　悪魔の実調べ（前書き）

パソコンの調子が悪いです・・・。
その為、遅れました。

第十一話　悪魔の実調べ

サッチ　Ｓｉｄｅ

今日はエースを助けたツバサ君への宴だ。
と、いってもみんな勝手にドンチャンしてるだけだけどな。

ツバサ君は海兵で敵だけどとってもいい子だ。
今も多くの俺達の仲間に囲まれてる。

「おい、少年。あの時はありがとうよ！あんたが助けてくれたおかげで俺は親父の船に乗ってられる。」

「俺もだ！！海軍は嫌いだが少年は好きだぜ！少年に乾杯だ！！」

ツバサ君に助けられた奴はこの船にも大勢乗っている。
連中はツバサ君にお礼を言い、ツバサ君のグラスに酒を注いでる。

「お前ら俺の翼に近づくんじゃねぇぇぇぇ！」

「ギャァァァァ！！エース隊長が燃えた！！」

「ちょっ！！マルコ隊長ーー！！エース隊長の火が酒に引火しました！！」

「エースごと海に投げ入れろよい。」

エースはエースでツバサ君にフォーリンラブだ。

あーぁ。ツバサ君困ってるし。

あ、エースがマルコに捕まった。
あ、海に投げ入れられ・・・・・お、ツバサ君が助けた！
エース、ツバサ君に抱きついた。ちょっと羨ましいぞエースよ。

「サッチ、さっきから何をブツブツ言ってるんだ？」

「んー実況中継「翼ーーー！！やっぱ好きだーーー！！」『うわぁぁぁぁ。』「エース！！」・・・おーマルコがついに怒ったぞ。」

「ゼハハハハハ。エース隊長もあいつも元気だな。」

「若さゆえだろ。さ、さっさと調べようぜティーチ。」

せっかくの宴なのに俺はツバサ君が食べた悪魔の実について調べようと友人のティーチと図鑑を熱読中。
いや、マルコに「それくらいしろぃ。今回の罰だ。」って言われてよ～。逆らったら燃やされるし。あの南国不死鳥に。
俺だけ罰って酷くね？
なんでエースはツバサ君にベタベタしてるのに、なんで俺はティーチと図鑑を睨めっこ？

「俺が不満なら、もう宴に戻るから。」

「待て待て待ておっさんを一人にしないで！！おっさん寂しくて死んじゃう。」

ティーチは暇さえあれば悪魔の実図鑑を眺めてる。
だからティーチに手伝って貰えればすぐに分かると思ってたのにな～。

「う～ん。無いな～。」

「まぁ悪魔の実なんて載ってないのが普通だしな。図鑑に載ってないかもしれんぞ。」

「うーーん・・・じゃあもうやめよう。俺もツバサ君に構いたい！ツバサ君ーーー！！」

「行かせないよい。」

「ゲフッ。」

さっきまでエースを殴っていたマルコがいつの間にかやって来た。
ちょっお前は呼んでない。俺が呼んだのはツバサ君だって・・・。

「で、分かったのかよい？」

「それが、さーーーっぱり。な、ティーチ。」

「ああ。さっきも言ったが悪魔の実なんて図鑑に載ってる方が珍しいしな。」

「ちゃんと、調べたのかぃ？」

「あぁ・・・・・・・・・・・・・・

チェリーパイ食べながらな。」

「よし、燃えろ。」

「待って待ってマルコさん！！ティーチさりげなく先に逃げるな！！」

いいじゃんかよ、俺だって腹減るし、ティーチが俺の前に大量のチェリーパイ置くからよお前はこれは食べるしかねぇだろ。

「サッチ今すぐ真面目に調べろ。じゃねーと、お前もエースみたいにしてあげるよい。」

「は？エースみたいって・・・・！！！」

『エーーースーーーーーー！！！！』

「エースがマルコに殺られたーーーーーーー！！！」

「エース隊長がマルコ隊長に血祭りにあげられたぁぁぁ！！ナースを呼べぇぇぇ！！」

「・・・・・・・・・・・・・ティーチカモーーーーーン！！！！！」

とりあえずもう一回見直そう。
そうじゃないと今度は俺がナース送り。

「で、どんなんだった？」

「えーっと、・・・あ！！あったコレコレ！！ツバサ君が食べた奴絶対コレ！！マルコー！ツバサ君が食べた奴これだーーー！！！」

「・・・・・・・・・・これは・・・・・・」

サッチ　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

～オマケ（次回予告？）～

「ハッ、俺は一体・・・・。」

『良かった。エース目を覚ました。』

「翼？あれ俺どうしたんだ・・・・？？？」

『？？？？？？』

「おーい！！ツバサ君が食べた実が分かったぞーーーー！！」

第十一話　悪魔の実調べ（後書き）

黒ひげ登場。

キャラ設定？（前書き）

感想見て気付いた。

設定書いてなかった・・・・・。

キャラ設定？

～主人公～
名前：翼（つばさ）
苗字はあるが、今のところ不明。（後でわかります。）
性別：男
出身地：東の海のとある島　別名：第二のラフテル
異名：先読み
設定（今までの流れ）：
トラファルガー・ローとは幼馴染関係。
勘違いして、海賊ではなく海軍へ入隊。
世間から、先読みのツバサと呼ばれているが、ただ勘違いをしているだけ。
勘違いをしているだけだが、何故かスピード出世。

一般人・賞金稼ぎ・革命軍・海賊・海軍関係無く愛されてる青年。
でも少年に見える事から、周りから子供扱いを受ける事も。

実は、Dの一族の一人。
Dの一族には“ツバサ”ではなく、“翼”で呼ばれる。
でも例外でDの一族じゃない人（例：ミホーク）からも“翼”と呼ばれる事がある。

（現在の話←）
白ひげ海賊団の二人の隊長エースとサッチにより、翼が誤って悪魔の実を食べてしまう。

〜原作メンバー？〜
名前：ポートガス・D・エース
職業：白ひげ海賊団２番隊隊長
異名：火拳
設定（今までの流れ？）：
サッチと一緒に買出しに行ってる途中、嵐に遭い海に落ちる。
海の中で翼に助けられた。
無人島でサバイバル生活をして３日目にサッチと合流。
だが、サッチが拾った悪魔の実で投げ合いをしていたら運が悪くそれを食べて気絶した翼を自分達の船に連れて行く。
現在翼を溺愛中。

名前：サッチ
異名：歩くフランスパン（翼が言い定着中）
職業：白ひげ海賊団４番隊隊長
設定：翼に悪魔の実を食わせた（？）張本人。マルコが苦手？

名前：クザン
異名：青雉（翼は雉と呼ぶ癖がある）
職業：海軍本部大将
設定：
主人公に雉と呼ばれる。
仕事にサボりに主人公の元へ行く事がある。
部下にいつも怒られる。
主人公がたまに雉からサボり魔と言いかえられることがある。

名前：ジュラキュール・ミホーク
異名：鷹の目
職業：王下七武海
設定：
会議はつまらないが海軍本部に翼が居る為、必ず行く。
翼の為ならなんでもする。
Dの一族でもないのに“翼”と言う。

名前：トラファルガー・ロー
異名：死の外科医
出身地：北の海
職業：ハートの海賊団船長
設定：
東の海からやってきた翼とは幼馴染関係。
よく、運を翼にとられることがある。
海賊を海軍と間違った翼の耳の中を調べるのが最近の野望でもある。

オリキャラや他の人達は？で紹介。

第十二話　捻じ曲げた運命（前書き）

また今日も2話くらいは更新しようかと。

第十二話　捻じ曲げた運命

ティーチ　Ｓｉｄｅ

サッチと共に悪魔の実図鑑で例の海兵が食べた実を調べていたらサッチはとある実の事について書かれたページを指した。

サッチが指した悪魔の実を見た瞬間、俺は絶望と言い現しの様の無い恐怖を覚えた。

ティーチ　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

翼　Ｓｉｄｅ

『ヤミヤミの実？』

「おう、自然系（ロギア）でそれを食べた人間は、闇人間になってしまうんだと。」

『へ～。自然系（ロギア）か。』

サッチが教えてくれた、僕が食べた悪魔の実はヤミヤミの実と言うらしい。
自然系ってことは大将達と同じってことか。お揃いってか、うわ嫌だな。

「つかよ～サッチが調べなくても海が能力を使ったほうが手取り早く分かるだろ。」

『僕使い方分かりません。』

「よーし、じゃあ俺がロギアの先輩として教えてやる。
いいか翼。とりあえずあそこに居るパイナップルを「不死鳥の力思い知れよぃ！」やるかこの南国フルーツ！！火拳！！」

『うわぁぁぁぁぁ！！エースまた燃えてる！！ダメだよ！さっきそれで酒に引火したんだから！』

「大丈夫大丈夫！今度はうまくやるって・・・・・・・・・・・・・・・

あれ？あれぇぇぇぇぇ？」

「なんだよエース、変な声出しやがって。お前は一分でもおとなし

く出来ないのか？」

「ママママママ、マルコ！俺・・・・・火拳が出ねぇ！？」

翼　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ティーチ　Ｓｉｄｅ

俺には野望がある。
それを成し遂げる為なら手段を選らばねぇ。

俺はずっと白ひげの船に乗って機会を窺っていた。
いつか俺の手にヤミヤミの実が手に入るように願った。

しかしそれはこの海兵に容易く打ち砕かれた。
こいつがヤミヤミの実を食べてしまった。
何年もこの白ひげの船に居座りずっと機会を窺っていた俺の野望を
このガキが打ち砕いた。

腸が煮えくりかえる俺はサッチ達と共にいる海兵を見やる。

するとあの海兵もこっちを見ているのではないか。
エースは火拳が出来ないとマルコに泣きついてるあの喧噪のなかあいつは俺をじっと見つめてくる。

（僕の勝ちだ。）

あいつは俺に向かって目を逸らさずにそう言い切った。

驚く俺にあいつは満足そうに笑いまたエース達の方を向く。

なぜあいつは俺に向かってそう言ったのか？

あぁそうだ・・・・・確かあいつの異名は〈先読み〉

もしあいつが本当に未来が分かり俺がヤミヤミの実を手にした未来を予見していたなら・・・

あいつは俺の野望を阻止する為に自ら悪魔の実を・・・・

悪魔の実を食ったのも全て計算で・・・・

俺の頭にはあいつの口の動きが何度も繰り返される。

（僕の勝ちだ。）

思い出すたびに俺は足がすくみ恐怖を感じる。

勝てる訳がねえ。

俺は所詮このガキの手の平で踊らされてるだけなのか・・・・・
しかしこのガキだからこそ今若くして海軍少将までのぼりつめて、
親父をはじめとしたこの船の多くの野郎共の支持を得ているのか・・
・・・・

ティーチ　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

翼　Ｓｉｄｅ

『エース、とりあえず落ち着け。』

「うん。じゃあ翼俺を抱きしめ「ツバサ君サッチ兄さんとあっちで
お話しようか。」おいサッチ俺と翼の時間を邪魔するな。」

「お前この子に近づくの禁止な。お前なんかサッチと同じ匂いがす
るよい。」

「ちょいちょいマルコ君？それはどういうことかな～？」

「黙れ変態歩くフランスパン。」

エースが火拳が出来ないと泣き出しそれを必死に宥めるマルコと僕。
そこにサッチが乱入し何やら三人でギャーギャー騒ぎ出した。仲が良いね。

ふと視線を感じそちら見やると一人の男がこっちを見ていた。

んー・・誰だっけこの人？えーっと確か・・・ティ・・ティ・・ティーカップ的な名前だったと思う。
なんこっちをじっと見てくるんだろう？

『（あ、よく見ればあの人口の周りに沢山の食べカスがついてる。どうしようあれ目立ちすぎて目が離せない、つかよくもまぁあんだけ口の周りにつけたな。一応言ったほうが良いよな？気付くかな～？）口についてる。』

あんまり大声で言ってもあの人が恥をかくだけだからここは口パクで。

お、気がついたのかな？目をかっと開いた。
良かった良かった。安心して僕はにんまりと笑う。

「ツバサ君ーーー。マルコとエースが苛める～！」

「近づくなサッチィィィィィィ！！俺の翼に手を出すなーーー！！」

『いや、僕いつからエースのものになったの？』

「おい。」

『？？』

またサッチとエースに絡まれていたらさっきのティーカップが来た。（もう名前これでいいや分かんないし。）

「お前はすげぇな。（俺はお前には勝てねぇ）」

『（なにがすごいんだ？あ、あれか食べカスがついてるの教えてあげたからか？もしかしてわざわざ礼を言いに来た？）いえいえそんな。（でもまだ食べカスついてるよ。プッ笑える。）』

「（こいつ余裕に笑いやがって・・・やっぱり敵わなねぇな・・・まぁいい。これもまた運命だ。）しっかりやれよ。（お前が曲げた運命を見せてくれ。）」

『（しっかりやれ？あ～この人たちに絡まれてることか。心配するなら助けてくれよ、まったく。）まぁ・・・・・頑張ります。』

翼　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

捻じ曲げた運命

～オマケ～

「ティーチ何翼にちょっかい出してんだよ！！てかティーチお前口の周りに食べカスついてんぞ。」

『エースそれ・・・・・。』

「ゼハハハハハ！本当だいっぱいついてやがる。」

『あり？今気付いた？まぁいいか・・・・。』

＝白ひげ編完結＝

第十二話　捻じ曲げた運命（後書き）

次回からは戻ります

キャラ設定？

～原作メンバー？～
名前：エドワード・ニューゲート
異名：白ひげ
職業：白ひげ海賊団船長
設定：
翼を気に入ってる。
海軍は嫌いだが、翼だけは嫌いになれない。（他の人達と共通）

名前：マーシャル・D・ティーチ
異名：ティーカップ（翼が決めた）（黒ひげは原作の時の為無し）
職業：白ひげ海賊団2番隊隊員
設定：
パイが大好き。
ヤミヤミの実を手に入れようと白ひげ海賊団に入った。
野望を翼に打ち砕かれたが、その後の様子を見ようと心を変えた。
（？）

名前：ドンホーテ・ドフラミンゴ
異名：桃色鳥（翼が勝手に決め、海軍本部にて定着中）
職業：王下七武海
設定：
なぜか同じ七武海の鷹の目とは気が合ったりする。（たまにだが。）
海軍本部の海兵から桃色鳥と言われるようになり、お出迎えの時に
他の人は名前で言われるのに対し桃色鳥様と呼ばれる様になった。

～オリキャラ？～
名前：フランク・サム
職業：海軍本部３等兵
設定：
翼の部下。
嵐の日に翼に助けられた海兵。
今年に入隊した新人海兵。
翼が大好きでしょうがない奴。
翼のファンクラブに入っている。

名前：ロレン
職業：海軍本部３等兵
設定：
翼の部下。
翼のファンクラブの一員。

名前：ファス
あだ名：ファスナー（翼部隊で定着中）
職業：海軍本部２等兵
設定：
ロレンとサムと共に居る事が多い。（本当は先輩として居るだけ。）
翼がファスナーと言い間違えたが実は気に入ってる。（ファンだから）
翼のファンクラブの一員。

他の人達（これから出る人含む）は？で。

第十三話　帰還するまでが冒険

シャボンディ諸島に一人の海兵が保護された。

「本当の本当に心配したんだよ。」

『ごめんなひゃい。』

翼　Ｓｉｄｅ

悪魔の実を食べた事で容易に海を泳げなくなった僕はエースとマルコにシャボンディ諸島まで送って貰った。

『本当にありがとう。こんな所まで送ってくれて・・。』

「翼・・・・本当に行くのか・・・・・？

やっぱ離れたくねえ・・・・・・・・・・・・・」

『いや、僕男だよ？』

「弟みたいだ。」

『弟？』

「ああ。ルフィだ。」

『あ、ガープ中将の孫か。』

「翼～これ俺の電伝虫の番号。毎日俺翼に電話するから翼も電話してくれ！」

『いやそれ大丈夫なの！？』

別れを惜しんでくれるエースさんは泣き止まず結局最後はマルコが気絶させて引っ張って帰って行った。（エースってマルコに殴られてばっかりな気がするんだけど・・・・はっ！まさかのM！？）

シャボンディ諸島から海軍の駐屯地に行き僕は無事に保護されました。

そこでおとなしく待っていたら雉が迎えに来た。

まぁ案の定今こうして怒られてるんだけど・・・。

翼　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

雉　Ｓｉｄｅ

その知らせは突然やって来た。

ツバサ君がシャボンディ諸島の海軍駐屯地で保護された、と。

おれは急いでシャボンディ諸島へ。

そこには探していたツバサ君の姿があった。

ツバサ君に特に目立つ傷もなく一安心。

「本当の本当に心配したんだよ。」

『ごめんなひゃい。』

「・・・・白ひげに捕まったという噂があるけど・・・・・・・

・・・それ本当？」

『そ・・・それは・・・・はい・・・・白ひげにいました。』

「！！！ツバサ君よく無事に帰って来たね。本当に何処も怪我してないの？」

本当に白ひげに捕まっていたのか。
でも何故彼は無事に帰って来れたんだ？

『どこにも怪我なんてしてないよ！あ、でも・・・悪魔の実を食べてしまいました・・・。』

「悪魔の実を・・・・一体何の実を食べたの？」

『自然系の実。だから僕・・・・・。』

そう言ってうつむくツバサ君。
そうかだからあの白ひげ相手でも無事に逃げだせたのか。

「とにかく本部に戻ろうか。みんな心配してるよ。」

『うん。』

雉　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

翼　Ｓｉｄｅ

雑に白ひげに捕まったことを聞かれ思わず言い淀んでしまった。
だって僕白ひげにはとってもよくしてもらったし（皆さんから沢山お菓子を貰いました）←餌付け

エースとは電伝虫の番号交換したし。
あれ？僕何気に白ひげの皆さんと打ち解けてたな。

とにかく海賊と仲良くしてたなんて知られたら
お前今までなにしてんの！って怒られそうだな。
赤犬やオニグモになんて知られたら殺されそう。

でもまぁ・・・・・白ひげにいたことは事実だし・・・正直に言うか・・・。

『そ・・・それは・・・はい・・・白ひげにいました。』

「！！！ツバサ君良く無事に帰って来たね。本当に何処も怪我してないの？」

いやいや怪我なんて、そりゃあ遭難の時はちょっとは怪我しましたが白ひげのきれいなナース達に治療して貰ったし。
白ひげのナースさん本当に綺麗だったな～、
あんなきれいな人がたくさんいるのなら僕白ひげに行ってもいいかな～。

おっとっと。話がそれてしまった。

『どこにも怪我なんてないよ！（綺麗なナースのおかげで）あ、でも・・・（手違いで）悪魔の実を食べてしまいました・・・・・。』

「悪魔の実を・・・・一体何の実を食べたの？」

『自然系の実。（あれ？でも何の実だっけ？）だから僕（あれ本当なんだっけ？サッチにちゃんと教えて貰ったのに。しまったもう忘れてしまったよ）・・・・。』

何の実だったか真剣に思い出していたら雑に本部に戻るよ、と言われた。

あぁ、やっと帰れる。

やれやれ長い冒険だったな。

結局何の実か思いだせず・・・。

翼　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

～オマケ～

「おお！翼無事に帰ったか！」

『あ、ガープ中将！はい只今帰還いたしました。』

「プルプルプルプル」

『あ、僕の電伝虫。はい、もしもし。』

「翼ーーー！！今何してる？」

「む？翼の電伝虫からエースの声が聞えた気が・・・・。」

『げっ！！な、なんでもありませんよガープ中将！！すみません後で掛けなおします。』

「ん？翼に電話したらジジイの声がした。」

「ツバサも無事に本部に帰れたようだねぃ。つかエース、さっそくツバサに電話してるのか。」

「べ、別に良いだろうが！」

「ハハハ。」

「笑うな！南国果実！」

「やるか！」

第十四話　先日の出来事（前書き）

今回オマケ無し。

第十四話　先日の出来事

＝ガレーラカンパニー＝

「・・・・・・・・ンマーこれはまた手酷くやられたな。」

「ったく、一体どこの海賊にやられたんだよ。」

『・・・・・・・・・・海軍です。』

僕は今、半分沈没しつつある軍艦を引っ張ってウォーターセブンの造船所まで来ている。

つい先日、

『ぎゃあぁぁぁぁぁ！！』

「待たんか翼！お前の能力わしに見せてみろ！」

マリンフォードの湾岸を僕は爆走中。
と、いうのもガープ中将が僕の能力を見たいからと攻撃を仕掛けてくるのだ。

いやあの確かに自然系で覇気と海楼石さえなければ、どんな攻撃も傷つかないけど・・・
僕が食べたヤミヤミの実は痛みがあるんです・・・・。

ついこの間、試しにと黄猿がレーザー撃ってきてメチャクチャ痛かった。
そのせいで僕は黄猿恐怖症になった。

ついこの間痛い目に遭ったのになんで好き好んでガープ中将の拳骨を受けなきゃいけないんだ！

「くらえ翼！」

『あわわわわっ飲み込めぇぇぇぇ！』

本気で砲弾を投げてくるガープ中将に向け能力を発動。
僕はなんでも闇に引きずり込むように能力を発動。

しかし・・・・・・・・

「ぶわっはっはっは！そんな技わしには通用せんわい！」

『砲弾闇を避けてきたぁぁぁぁ！！』
「愛ある砲弾は闇も貫くんじゃ！」
『いらねえ！そんな愛僕はいらない！
うわあああああ！！！！！！！！！！』
ボコンッ
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。』
「あ。」
「た、大変だ！！」
「ガープ中将が投げた砲弾が軍艦に当たったぞ！」
「誰の軍艦だ？」
「ツバサ少将の軍艦だ！！」
「すまん翼！！ぶわっはっはっは！！」

『・・・・・・・・センゴク元帥に怒られるぅぅぅぅぅ！！』

第十四話　先日の出来事（後書き）

次話はこの続きです。

変な終わり方してごめんなさい。

ちょっと用事が・・・。

次話は今日更新するのでよろしく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8326z/

勘違い青年の海軍奮闘記

2012年1月6日14時45分発行